

Nanzan University

Department of British and American Studies

平成21年度 文部科学省 大学教育推進プログラム採択

多文化社会における 英語による発信力育成

グローバル時代に活躍するための多元的学士力向上プログラム



目次

1	はじめに.....	1
2	活動報告.....	3
2.1	国際ワークショップ.....	4
2.2	特別講演会	7
2.3	卒業論文中間発表会.....	10
3	情報発信.....	12
4	次年度以降に向けて.....	12
5	資料.....	14
5.1	新聞記事	14
5.2	パンフレット	15
5.3	パネル	19
5.4	ポスター	20

1 はじめに

南山大学外国語学部英米学科では、平成 21 年度に、今後 3 年間にわたって海外の大学との積極的な交流を通じて、学生の英語による発信力を高めていく国際プロジェクト「多文化社会における英語による発信力育成—グローバル時代に活躍するための多元的学士力向上プログラム—」をスタートさせました。このプロジェクトは、平成 21 年度文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマ A】大学教育推進プログラム（GP：Good Practice 優れた取組）に採択されています。

日本人は一般的に自ら主張するということが少なく、さらにそれが外国語である英語となると、極端に寡黙になってしまうことが多いように思います。本取組では、国際ワークショップや国際シンポジウム、特別講演会を通じて「実体験に基づく異文化理解」を深め、自信を持って自らの意見を発信していける学生を育てます。さらに、それらの国際ワークショップや国際シンポジウム、特別講演会はもとより、卒業論文中間発表会も加えて、学生中心に企画・運営させることによって、企画・運営力も育成し、単に人前で英語が上手に話せるというのではなく、自ら情報発信の機会を生み出していける学生を育てます。また、大学教育における集大成である卒業論文については、中間発表会の模様の動画と電子ジャーナル化した卒業論文の両方をインターネットを通じて世界へ発信することによって、話し言葉と書き言葉の両面で情報発信を行います。このようにグローバル時代に活躍するために必要な「総合的な学士力向上」を多元的に目指すプログラム。これが本取組です。

本取組には、三つの大きな柱があります。「異文化理解力の育成」、「企画・運営力の育成」、「情報発信力の育成」がそれで、これらの力をもって、学士力の向上をはかり、地域社会へ貢献し、また国際社会にも貢献する人材を創出していくことを目指します。これは、私たちの学科が掲げる「多文化共生が進むグローバル社会の第一線で活躍できるよう、すぐれた語学力に加え、十分な異文化対応能力と国際理解力を備えた人材を育成すること」という目標とも合致しています。

本取組の三つの柱についてもう少し詳しく見ていきましょう。まず「異文化理解力の育成」ですが、海外提携校と連携し、本学および海外で国際ワークショップやシンポジウム等を行うことによって、実体験に基づく「異文化理解力の育成」を目指します。情報通信技術の発達によって、海外の研究者、学生と日本に居ながらにしてコミュニケーションを行うことが可能となりましたが、現在の技術では画面に収まる情報量、インターネットで

通信することができる範囲での情報の種類に限られており、これはあくまでも補助的なコミュニケーションの手段であると私たちは考えています。モニターを通してではなく、実際に相手を肌で感じながらコミュニケーションを行うという基本に立ち戻り、実体験に基づく「異文化理解力の育成」を目指します。また、外国人との交流や海外での体験を通して、単に頭で覚えた知識だけではない、自らの体験に基づく異文化理解を行うことによって、真の国際感覚を身につけていきます。

次に「企画・運営力の育成」ですが、これは私たちの取組の中で最もユニークな特徴の一つであると言えるでしょう。本取組では、国際ワークショップ、国際シンポジウム、特別講演会、卒業論文中間発表会といった様々な行事を行います。これらを学生が中心となって企画、運営します。こうすることで学生は、単なる受け身的な参加者としてこの取組に加わるのではなく、実体験を通して本物の企画・運営力を身につけていきます。学生の企画・運営委員会が定期的に集い、アドバイザー役のGP 嘱託講師の助言のもと、効果的なプレゼンテーションの仕方などについての勉強会を行い、それら普段の活動を通して得られたアイデアを活かして、国際ワークショップ、国際シンポジウム、特別講演会、卒業論文中間発表会といった行事を企画・運営していきます。自らの能力を発揮する機会が与えられるのをただ待っているのではなく、活躍する場所、あるいは活躍できる場所を自ら創出していける学生を育てることは、これからの教育の中で大きな意義を持っていると考えています。

三つ目の柱である「英語による発信力の育成」は、「英語」で「世界へ発信」がキーワードとなっています。インターネットなどの情報通信技術を活用して情報発信をしても、それが日本語であるならば理解してくれる人は限定されてしまいます。これを「英語による情報発信」とすることで、世界へ向けての情報発信が可能となります。本取組では、国際ワークショップ、国際シンポジウム、特別講演会、卒業論文中間発表会、卒業論文執筆のすべてにおいて英語を使用言語とします。それぞれの行事に積極的に参加することにより、話し言葉によるコミュニケーション能力を高める一方、英語で執筆する卒業論文の作成を通して、書き言葉によるコミュニケーション能力も高めます。学生は、これらの強化された英語による発信能力を駆使し、インターネット上で公開される卒業論文中間発表会の模様と電子ジャーナル化された卒業論文を通して、自らの主張を世界へ発信していきます。

私たちの取組は、これら三つの柱を支えにして「学士力の向上」を目指します。国際経験豊かな本学科教員の助言のもと、学生の企画・運営委員会が中心となって、学生自らが世界に向けて情報発信を行っていきます。単に英語力を向上させるだけではなく、専門的な学識に基づいて自らの意見を英語で発信できるようになることは、学部学生にとっては大きな挑戦であるに違いありません。しかしながら、「語学の南山」の伝統を守り、長年高い評価を受けて来た「アメリカ研究」の伝統を引き継ぐ本学科生は、日本の大学生の潜在能力を最大限に引き出すことを多元的に目指す私たちの「多文化社会における英語による発信力育成」プロジェクトによって、見事に次代を担う若者に成長してくれるものと確信しています。本報告書は、私たちの3年にわたる取組の初年度の活動についてまとめたものです。ご意見等賜ることができましたら幸いです。

2 活動報告

本取組の特徴は、学生の企画・運営委員会が中心となって、国際ワークショップ、国際シンポジウム、特別講演会、卒業論文中間発表会等の行事を企画・運営する点にあります。が、平成21年度は取組初年度ということもあり、学生の企画・運営委員会を組織した上で、教員が骨組みを作った行事に学生が参加し、企画・運営の体験を行うインターンシップ的な活動が主な活動となりました。実質的に事業が開始したのは2009年11月でしたが、正味5ヶ月の間に、国際ワークショップを2回、特別講演会を2回行い、加えて学生の運営委員会が中心となって卒業論文中間発表会も行いました。学生の運営委員会のミーティングも初回からすべて英語で行われ、「英語による発信力育成」を目指す本取組にとって、非常に希望が持てた初年度であったと言えます。



【学生企画・運営委員会ミーティングにて】

2.1 国際ワークショップ

第1回国際ワークショップは、2009年11月20日（金）に Erin Chung ジョンズ・ホプキンス大学准教授、石田訓夫本学客員教授、David Mayer 本学名誉教授をパネリストに招き、「移民問題を日米比較から考える」をテーマに、すべて英語でワークショップを行いました。日系ブラジル人、中国人留学生、日本人の3名が学生代表質問者として登場し、それぞれのパネリストに対して英語による質問を行い、活発な質疑応答をリードしました。

平成21年度採択 文部科学省 大学教育推進プログラム（GP）
英米学科「多文化社会における英語による発信力育成」
国際ワークショップ（一般公開：使用言語 English）
移民問題を日米比較から考える

世界のグローバル化とは国境を越えて人、物資、お金が自由に行き来する過程のことをいう。したがってこれによって、各国の経済、社会、文化は独立したものではありえず、地球規模のネットワークからの影響を絶えず受けることになる。移民問題は、グローバル化する世界にあって各国が直面する大きな問題の一つである。誰を受け入れ、誰を排除するかを決める移民政策は、国家のアイデンティティに関係する重要な問題である。本国際ワークショップでは、日米の移民問題をテーマにしながら、これからの移民政策の在り方を考えていきたい。

Kunio Ishida



Theme: "Jewish Migration and International Politics in the 20th Century"
◆南山大学外国語学部客員教授
◆研究分野: 国際政治
◆略歴: 前外務省総合外交政策局政策企画室企画官、在ヒューストン日本総領事館首席領事、在イスラエル日本大使館、在ロサンゼルス日本総領事館勤務

Erin Chung



Theme: "Immigrant Incorporation in Japan"
◆Johns Hopkins University, Assistant Professor
◆研究分野: 比較政治、東アジア政治、移民政策
◆主な著書: *Immigration and Citizenship in Japan* (Cambridge University Press, 2010)

David Mayer



Theme: "Japanese Immigrants, Baseball, and the Chunichi Dragons"
◆南山大学名誉教授
◆研究分野: アメリカ文学 (Urban Ethnics from Sociological Historical and Literary Viewpoints)
◆主な著書: *The American Neighborhood Novel* (Nagoya University Press)

写真: アメリカ合衆国への移民の入り口であったエリス島

代表質問者:
☆Ayumi Moraes 南山大学英米学科二年
☆Tian Yun 南山大学英米学科二年
☆奥村彰浩 南山大学英米学科四年
代表質問者以外の方から質問していただく時間も十分にあります。
司会: 山岸敬和 (南山大学外国語学部英米学科講師)

日時: 11月20日 (金)
15時15分～17時15分
会場: 南山大学B棟21教室

主催: 南山大学外国語学部英米学科
問合せ先: 英米学科合同研究室
Tel: 052-832-3111 (内線3630)
Email: eibei-gp@nanzan-u.ac.jp



【学生代表による質問】

第2回国際ワークショップは、2009年12月15日（火）に Jonas D. Stewart 名古屋アメリカンセンター館長を招き、“Meet an American Diplomat”と題し、2009年にアメリカ合衆国と日本の両国で起きた政治上のCHANGEについて、日米関係の歴史的背景も把握しながら理解を深めました。アメリカ政治研究およびアメリカ外交研究を専門とする学生を中心に、すべて英語による質疑応答が行われ、取組2年目に続く良いワークショップのサンプル提示を行うことができました。



【Jonas D. Stewart 氏と学生代表】

平成21年度採択 文部科学省 大学教育推進プログラム (GP)
英米学科「多文化社会における英語による発信力育成」

国際ワークショップ (一般公開: Language English)

Meet An American Diplomat

戦後、日本にとってアメリカ合衆国は重要な軍事同盟国であり、経済的にも深いつながりを持ってきた。アメリカの動向は、日本に大きな影響を及ぼす。2009年には、日本とアメリカでCHANGEが起こった。アメリカではオバマ政権が、日本では鳩山政権が発足した。このワークショップでは、このCHANGEでアメリカはどこへ向かうのか、そして日米関係はどのような形を取ろうとしているのかを一緒に考えていきたい。

Jonas D. Stewart



名古屋アメリカンセンター館長

経 歴

- 米国カンザス州レブンワート出身
- カンザス州立大学卒業 国際政治専攻
- 2001年 カンザス州立大学 常勤講師 (リーダーシップ学)
- 2002年 米国務省入省
- 在アルメニア米国大使館 領事部副領事、
国務省(ワシントン)オペレーションセンター
ウォッチオフィサー を経て2007年8月より現職

代表質問者:

- 長谷川あさみ (英米学科4年: アメリカ政治研究)
- 成田美佳子 (英米学科3年: アメリカ政治研究)
- 柴田華代 (英米学科4年: アメリカ外交研究)

☆代表質問者以外の方から質問していただく時間も十分にあります。

司会: 山岸敬和 (南山大学外国語学部英米学科講師)

日時: 12月15日 (火) 11時50分~13時20分

会場: 南山大学K棟25教室

(途中入室、昼食持ち込み可)

主催: 南山大学外国語学部英米学科
問合せ先: 英米学科GP事務局

Tel: 052-832-3111 (内線3504)

Email: eibei-gp@nanzan-u.ac.jp

2.2 特別講演会

第1回特別講演会は、2010年1月18日（月）に Christopher D. Tancredi 慶応義塾大学言語文化研究所准教授を招き、“Condition B as an Epiphenomenon” と題した言語学の講演会を開催しました。普遍文法の研究を続ける Tancredi 氏は、生成文法理論の最新理論を踏まえた分析を提示され、学生の知的好奇心を大いにかき立てました。

平成21年度採択 文部科学省 大学教育推進プログラム（GP）
英米学科「多文化社会における英語による発信力育成」

第1回講演会（言語学）

Language: English

Dr. Christopher Tancredi（慶応義塾大学）

Condition B as an Epiphenomenon

生成文法では、Chomskyが1981年に提案した理論によって、名詞句を再帰形などの「照応形」、「代名詞」、「指示表現」という3種類に分類し、それぞれがいつ使用できるのかについて、条件A、条件B、条件Cという3つの条件（「束縛条件」と言います。）を用いて説明してきました。今回のTancredi先生のお話では、最新の言語理論の視点からこれを見直し、代名詞に関する「条件B」は束縛条件として仮定する必要は無いということを提案されます。

「理論言語学」とはどのような学問なのか、私たちが普段無意識に使っている言語の背景にはどのような仕組みが隠されているのか、最先端の言語学研究では、どのような研究がなされているのか等、言語学を専門とする人達以外にも是非聞いて欲しい講演です。また、すべて講演は英語で行われますので、専門的な内容を英語で聞く、まさに「英語を学ぶではなく、英語で学ぶ」良い機会です。多くのみなさんの参加を期待します。

英米学科長

英米学科生以外の方もご参加いただけます。（予約不要、入場無料）

日時：1月18日（月）15時15分～16時45分
会場：南山大学M棟MB1教室

主催：南山大学外国語学部英米学科
問合せ先：英米学科GP事務局
Tel: 052-832-3111 (内線3504)
Email: eibei-gp@nanzan-u.ac.jp



第2回特別講演会は、2010年2月22日（月）に Bonnie D. Schwartz ハワイ大学教授および Kamil Ud Deen ハワイ大学准教授を招き、それぞれ “Let’s Go on a Hawaiian Tour (of Child L2 Acquisition)”、 “Binding in Thai: The Case for Nativism” と題した言語獲得に関する講演を行った他、学生の理解を助けるために、有元将剛、村杉恵子本学教授が各講演の前に解説を行いました。この講演会で特筆すべきは、最初に学生代表が本取組についての概要説明を英語で行ったことで、学生の英語による発信という意味から、大いなる一步を踏み出すことができたと言えるでしょう。



【学生代表による本取組の概要説明】

南山大学外国語学部英米学科 平成21年度採択 文部科学省 大学教育推進プログラム(GP)
「多文化社会における英語による発信力育成」主催
南山大学言語学研究センター 文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(研究拠点を形成する研究) 共催

講演会 (言語学)

Dr. Kamil Deen (ハワイ大学 マノア校)
Dr. Bonnie Schwartz (ハワイ大学 マノア校)

Schedule

I . Introduction : Masatake Arimoto (Nanzan University)
“Basics in Binding”

Lecture : Kamil Deen (University of Hawai ‘i)
“Binding in Thai: The Case for Nativism”

II . Introduction : Keiko Murasugi (Nanzan University)
“Introduction to Grammar Acquisition”

Lecture : Bonnie Schwartz (University of Hawai ‘i)
“Let’s Go on a Hawaiian Tour (of Child L2 Acquisition)”

日程:平成22年2月22日(月)

時間:13:30—17:30 (Ⅱ部構成、出入り自由)

場所:南山大学 名古屋キャンパスM棟 MB1

※英米学科生以外の方もご参加頂けます。(予約不要、入場無料)

※講演は全て英語で行われます。

人は、どのように母語や外国語を獲得するのだろうか

こどもは、親から教えられることなく、
どうやって文法構造や原則を獲得するのでしょうか。
第二言語はいったいどのように獲得されるのでしょうか。
現在ハワイ大学で進められている
第一・第二言語獲得の最新の理論と実証的な研究を
紹介いたします。

問い合わせ: 南山大学英米GP事務局
Mail : info-eibei-gp@nanzan-u.ac.jp

2.3 卒業論文中間発表会

卒業論文中間発表会は、本学科では従来ゼミ単位で行われてきましたが、2008年度に初めて学科行事として位置づけました。今年度は、学生の企画・運営委員会が主体となつて行う本取組の主要な行事のひとつとして、2009年11月4日（水）に5つの教室に分かれて卒業論文の中間発表を行いました。司会、進行、発表、質疑応答のすべてが英語で行われ、発表者はパワーポイントによるプレゼンテーションによって自分の専門分野についての発表を行いました。

時期的に本取組が本格的な活動を開始したばかりであり、今年度の行事を通した異文化理解力の育成、企画運営力の育成、情報発信力の育成が十分反映されているとは言えませんが、学生はベストを尽くし、次年度に続く立派な卒業論文中間発表会を開催することができました。



平成 21 年度採択 文部科学省 大学教育推進プログラム
「多文化社会における英語による発信力育成」

卒業論文中間発表会（外国語学部英米学科）

英米学科ではこのたび下記の要領で卒業論文中間発表会を開催いたします。4年生の先輩たちがそれぞれに取り組んでいる卒業研究の中間発表を英語で行います。この発表会は、発表者にとっては自分の研究のさらなる向上を図り、観客の皆さんにとっては自分の関心を深める良い機会だと思います。各発表の合間に入退場自由なので、ぜひ興味のあるテーマを扱った発表に足をお運びください。多くの方々のご参加を心よりお待ちしております。

日時： 11月4日（水）13：30～16：00 場所： B41、B44、B45、B46、B47（B棟）
--

13:30－14:00 英米学科長および運営委員長からの挨拶

14:00－16:00 研究発表 1. 14:00-14:30 / 2. 14:30-15:00 / 3. 15:00-15:30 / 4. 15:30-16:00

B41

1. Nami Tanaka: "Ladies, Home or Work? The Development of AFDC in the 1960s"
2. Manami Fukuta: "Environmental Refugees: An Upcoming International Issue"
3. Koji Yoshihara: "Can Having Guns Continue to be Positive in the United States?"
4. Yukiko Masuda: "Oppression of Women in Colonised Countries in Buchi Emecheta's *Second Class Citizen*"

B44

1. Emi Sekine: "The First Step toward the Achievement of Global Peace"
2. Ayako Iida: "Preventing Ghettos"
3. Megumi Makino: "Child Soldiers: How can we Help Children in Conflict Areas?"
4. Takaya Kondo: "Is Abbey Road a Non-Smoking Area?"

B45

1. Hiroko Tawada: "Prevent Juvenile Delinquency or Punish It?"
2. Ayame Toda: "Model Minority: An American Stereotype of Asian Americans"
3. Akihiro Okumura: "How Public is American Baseball? Stadiums and Public Funds"
4. Yumi Imai: "Japan's ODA: The Importance of "Basic Educational Development""

B46

1. Nobumasa Yokochi: "Null Subject and Null Object in L1A and L2A"
2. Yumi Kawamura: "American Women Soldiers in the Iraq War"
3. Miyu Shibata: "Should Affirmative Action be Abolished?"

B47

1. Akari Watanabe: "Japanese Education and the Nanjing Massacre"
2. Ikumi Yamada: "Norwegian Diplomacy and World Peace"
3. Hanayo Shibata: "The Tragedy of American Diplomacy: What Williams didn't Know"

ご不明な点は、太田あや美（運営委員長、英米学科3年生、Eメール：a.orange@k8.dion.ne.jp）までお問い合わせください。

3 情報発信

本取組は、平成 21 年度文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマ A】大学教育推進プログラム（GP）に採択されており、補助金を受けた取組として広く社会に成果を還元する責務を負っていることは言うまでもありません。今年度における情報発信は、Web ページ（<http://eibei-gp.nanzan-u.ac.jp>）ですべての行事の模様を紹介している他、パンフレットの配布、および国際ワークショップ、特別講演会の一般公開によって、広く社会に私たちの取組について情報を発信してきました。その意味で、第 2 回講演会において、数名の高校生の参加者もあったことは大変嬉しく思っています。

4 次年度以降に向けて

平成 22 年度は、ディキンソン大学（アメリカ合衆国ペンシルベニア州）とハワイ大学（同ハワイ州）との交流事業が計画されています。ディキンソン大学とハワイ大学の学生と共に本学においてワークショップ等を開催し、実体験に基づく異文化理解を深めるとともに英語による発信力の強化を図ります。また、これら行事の企画・運営は学生の企画・運営委員が担当し、教員の支援を受けながら、企画・運営力を高めていきます。

今年度はその調査および打ち合わせのために本学科教員が 3 月中旬にハワイ大学を訪問し、マノア校とヒロ校の関係者と今後の事業協力についての協議を行いました。



【ハワイ大学マノア校にて】



【ハワイ大学ヒロ校にて】

平成 23 年度には、本学学生がハワイを訪れ、ワークショップでの発表等の活動を行うことが予定されています。今回のハワイ訪問では、平成 23 年度に本学学生がハワイを訪問する際に何らかの形で若者の日米交流の面で役立つことができればと、在ホノルル日本国総領事館を表敬訪問し、加茂総領事と小澤文化担当領事に本取組の概要の説明を聞いていただくことができました。今後継続して協議を重ね、本取組が学士力向上の実りあるプログラムとして機能するだけでなく、新世代の日米交流の契機となることを期待しています。



【在ホノルル日本国総領事館にて】

5 資料

本取組は、岐阜新聞で概要が紹介された他、学内外に広く取組について情報発信するために、配布対象者を考慮して日本語版、英語版の2種類のパンフレットを用意し、またパネルおよびポスターも作成しました。

5.1 新聞記事

2009年11月15日の岐阜新聞にGPプログラムの取組が掲載されました。



5.2 パンフレット

学科展旗榜

私の出身は、大学外国語学部東京外国語科が得意なところ——それは、現在在学中の国際通訳として広く使われている英語を自由に操ることが出来る者、世界各地の社会と文化を深く理解出来る者、グローバルな視点から日本の社会を見つめたいという意欲のある若者、そしてこれからの能力を駆使して地球社会と国際社会に貢献出来る若者です。

英語が出来るだけでは駄目、相手に伝わるメッセージの巾を充実させるためには、そのための英語力が必要です。これがですね。



日本の文化にとらわれず、むしろ、今は多くの文化が同時にぶつかり合い、混ざり合っている。世界各地の社会文化について学び、国際感覚を身に付け、多文化社会の中で自分のアイデンティティを見失わずに生きていける人になってほしい。これに加えて、日本社会の未来を担う、若者の文化には果敢と自己発見、自己変容、そして創造的に何かを企画・創造していくアイロニジ精神が必要だ。

私たちの文藝部が音の good friends（親しい友人）として交際を受けている文化活動には、海外には愛宕川音楽フェスティバルのように主催する側が主として「クラシック」には、海外の音楽の発展を促進して、日本の学生生の存在を最大限に引き出すようとする、国際的意気込みが感じられる「音楽祭」である。

この「クラシックのイベント」の長は、一般に音楽は「おもしろい」ものだからの学生一顧に「音楽」を体験することができず、私たちの活動は「クラシックの音楽の文化の発展」を目的として行っています。

学生企画・運営委員会

Shizuko Kato

私にとってもGRは、「アパライズ」を前にできるコミュニティです。講演会などは、みんながアパライズを出し合っている場だから、大人数で盛り上がり得られます。また、GR委員は1年生から4年生までいるので、普段はなかなか交流できない年上学生とも仲良くなる、これがまず「キックバスター」を充実させたい」「たぐさんの人と交流をおこしたい」という方は、是非参加してほしいです。



Yumi Saito

The first I found the GP program is that it would mean a lot to me. For example, this is just *my* version of my friends, my friends having a hard time with job hunting. At first, my feeling of attaching to graduate school, so I'm not looking for a job. Instead I'm trying to do something academic. The reading books related to my major, American history. I want to attend special events and workshops to learn what improving my use for English, so this program will be helpful. Also, I would love to use English more and this program is a good way to do that because we use English to communicate with each other and post things on the web in English. Moreover, I don't have friends younger than me, so I heard that a lot of members want, the same year as me, so I want to talk with them as 'Aha, I want to be friends with them!' if I possible. I want to learn more in studying in America if I want to. I want to learn native American people, such as civil rights held by native Hawaiian people.



外国語学部 英米学科

Department of British and American Studies, Faculty of Foreign Studies

南山大学外国語学部英米学科では、英語を“体系的”に学ぶだけでなく、英語で様々な専門分野について学び、考え、議論することで、多文化共生社会でグローバル社会の第一線で活躍できる、優れた語学力に加え、十分な異文化対応能力と国際力を備えた人材を育成します。

例题 4-1

グローバル社会の第一線で活躍できるよう、優れた語学力に加え、十分な異文化対応能力と国際理解能力を育てたいと考えています。英語だけでなく、その他の言語(フランス語、ドイツ語、スペイン語、ポルトガル語、中国語、韓国朝鮮語など)やアジア言語の中なら、または2言語を専門的に学ぶことも考えています。

— どう学ぶ

1・2年次には毎日英語で「聞く・話す・読む・書く」の訓練を徹底的に行い、3・4年次では専門の言語学や文学・外国語教育、コミュニケーション、思想、政治、経済、外交、歴史、社会など、それぞれの学問分野の研究に取組みます。5・6年次の科目は英語と日本語の両方で学べるようなので、4年次の終わりのまでは英語で専門分野での学習ができるようになります。

目次

英語を系統的に学ぶだけでなく、英語で書かれた学習領域についての字、音、読み書きの力の養成を重視して、言語学・コミュニケーション・英文学・英語教育・リテラシー研究・文学・歴史・文化・政治・経済などの分野での学習習熟を通じて、十分な文化対応能力と国際理解力を身につけて欲しいと思っております。そして、文化生活社会の中で活躍できる人材の育成を目指しています。

泰山大學經濟學部經濟學科 大學教育學院 華南島
 7466-8673 省古城龍山山麓里18
 Phone: 052-852-3278(直通) Fax: 052-852-3279
 URL: <http://ebs.gy.ac.cn/ucg> MAIL: info@ebs.gy.ac.cn

Nanzan University
Department of British and American Studies

平成21年度 文部科学省 大学教育推進プログラム採択

多文化社会における 英語による発信力育成

グローバル時代に活躍するための多面的学士力向上プログラム

また海外国語系大学における海外語の教員も、多文化社会における英語上での発信力育成、グローバルな時代には精通する必要がある。英語上での発信力育成、グローバルな時代には精通する必要がある。英語上での発信力育成、グローバルな時代には精通する必要がある。

3. 英語力向上のための活動と同時に、学生の「態度・進育力」の育成も目指している。プロフェッショナルであること。

本校の取り組みについて学生は、海外進路高校からの教員および学生の招聘による国際ワークショップの開催、海外提携校での合同開催など、グローバルにむける姿勢、それらのワークショップなど、グローバルの学生主体による企画・運営などを体験することになります。

本学は「語学の南山」として絶えず自己改革という挑戦を続けていますが、近年はさらなる国際化をめざし、全学館において、英語を「学ぶから、英語で」学ぶこととまた、学生のみならず教員、研究者も含めた双方向での交流を重視しています。

国内外において、教員の相互に交流をおこなう本邦ではその目的を推進するもので、また、学部生（教員部）における「プロジェクト・チーム」の企画・運営や、海外成果の世界に開ける「国際交流」は、本学グローバル・スタディにある趣意を自己改善の一環といえるでしょう。本取組は優秀な学生が集う南山だからである「プロジェクト」であり、また、学生の能力を最大限に引き出すものであると、大いに期待しています。

南山大学長 ミカエル・カルベ

The diagram illustrates the 'Internationalization Strategy' (国際化戦略) as a central goal, supported by five key educational components and a feedback loop for external promotion.

- Internationalization Strategy (国際化戦略)**: The central goal, represented by a large orange circle.
- On-campus Internationalization (キャンパス内国際化)**: The primary focus, represented by a large orange rectangle.
- External Promotion (海外の促進)**: Represented by a blue rectangle at the top, which feeds into the on-campus strategy and has a feedback loop.
- Supporting Components (Supporting the On-campus Strategy)**: Five blue rectangles arranged around the central goal:
 - Enterprise/Community Education (企業・実社会の育成)**: Includes 'Education for the Enterprise' (企業による教育) and 'Education by the Enterprise' (企業による活動).
 - Information Literacy Education (情報発信力の育成)**: Includes 'Education for Information Literacy' (高度で正しい発信) and 'Education for Information Literacy' (伝ふ力・読者の理解).
 - Intercultural Understanding Education (異文化理解力の育成)**: Includes 'Education for Intercultural Understanding' (海外の目・学生との交流) and 'Education for Intercultural Understanding' (海外の体験).
 - Language Education (語学教育)**: Includes 'Education for Language' (高度で正しい発信) and 'Education for Language' (伝ふ力・読者の理解).
 - Global Education (グローバル教育)**: Includes 'Education for Global Education' (海外の目・学生との交流) and 'Education for Global Education' (海外の体験).

本展の組み立ては、三つの大きな柱があります。それぞれ「企画・運営力の育成」、「情報発信力の育成」、「異文化理解力の育成」となっています。これらの力をもって、管土力の向上をはかり、地域社会へ貢献し、また同僚社会にも貢献する人材を創出していくことがこの展の目的です。

これは、私たちの学習が掲げる「多文化共生推進ビジョン」が、社会の第一線で活躍できるように、すべての語学力に加え、十分な異文化対応能力と国際理解力を備えた人材を育成すること」といふ目標にも合致しています。

Thesis Introduction Presentation

情報発信力の育成において中心的位置を果たす卒業生を2008年度発表会に、これまでゼミ単位で行われてきたものを論文発表会として行いました。この行事は学生が中心となって企画・運営され、すべて英語で行われました。本取組組みでは、今後これをさらに充実させ、Web公開していきます。

2009
11.42009
11.20

世界のグローバル化に伴い、各国が直面する大きな問題の一つである移民問題。日本の移民問題をテーマに、これからの移民政策の在り方について3人の識者の方々を招いて考えたい。講演会の最後には、英米学部の学生たちも参加した。

名(Ayumi Moriya 2年, Tian Yun 2年, 奥村彰治(4年))が代表としての質問をし、大層有意義な場となりました。



Mr. Anthony Chenevix

The Nazami University workshop was well-organized, well-attended, and lively. I found the students to be engaging and intellectually sophisticated. The student commentators, in particular, made the workshop especially effective as they not only offered thoughtful commentary on each talk, but also stimulated questions and comments from the audience. Although the audience members who asked questions were articulate and well-informed, perhaps more audience members would have participated had they been encouraged to ask their questions in Japanese if necessary. Overall, I was very impressed by the organizers and students who participated in the workshop.

Before this appointment, I did not know there were people doing research on immigration-related subjects, so it was very interesting for me as an immigrant in Japan, to be happy to learn that Dr. Chang was doing some research concerning the Brazilian community in Japan. I also learned that assigned to the immigration population is Korea, Japan is behind in terms of accepting immigrants as part of the nation. I asked them what she thought about Japan making good use of the immigrant labor force when it was needed since getting rid of them now when Japan is in recession. She confirmed what I thought was the reality Japan may open its doors for immigrants widely but it will take time.

2009
12.12

2009年、この海外での政治的CHANCE。その外にはどこへ向かうのか、そして日本経済はどのような形を収めるかに依るであろう。名古屋のアリカンテ・グループ、Joans D. Stewart は迎え受けるように、約250万の「アフリカ人」は、英・オランダに所属する、近付くのは2014年。成田美生子氏は、英・オランダに在籍の3名が代表を買回しをして参加した。学生同様に事前に準備を行い、大々発表し、「アフリカ」をけん引しようとした。

Mr. Joans D. Stewart



Mr. James D. Stewart

Mr. Stewart's workshop was very insightful, informative, and kept the audience interested. It served as an excellent example of the use of visual aids and also with understanding the audience you are speaking to. As a GP workshop, I was especially excited to see our students actively asking questions that were well thought out during the Q&A time. Overall, I felt it was an ideal workshop where students could interact with the speaker quite freely.

田嶋文治博士は、1981年に提議した「環境意識の向上、生活習慣を認識・修め、自然開閉・指示・表現」という目的に分類し、それぞれがいつ使用されるのか、について条件A、条件B、条件Cの3つの条件（条件Aを1）として、認明してAとL2、Thursdays、又は、最初の3日間のみの場合、この3日間は、代名詞に関する「条件B」は、条件Aについて取捨する必要はないことを提議して以下を挙げた。



Dr. Christopher Turner

The lecture's topic was "Condition B as an Epiphenomenon". It was about generative grammar. This lecture was a little difficult for me to understand. However, Professor Turchetti was smiling from beginning to end. His gentle smile made me feel relaxed.

第2回講演会では、現在、ハワイナ大学で進められている第一・第二言語獲得の最新の動向と学
証的研究を紹介していただきました。講演会の冒頭では、学生運営委員である宮川大(美米大
学員3年)により、GMの取組について英語でのプレゼンテーションが行われ、これまでは「英語
」での講演会の場を演出することができました。



Dr. Donaldo Schwart

Dr. Karim Deen

Mr. Helene Myrnes

Through the lecture of Dr. Schwartz, we learned that although people go through different processes for second language acquisition and first language acquisition, we achieve to the same language skills in the end.

講義を通して、第二言語習得と第一言語習得では違う過程によって言語を習得しているが、最終的には同じスキルに達することの5%がわかりました。

It was very difficult to take the lecture of linguistics; therefore, everything was new and interesting especially. I was interested in two things: 1) the fact that all human beings have been blessed with the ability to use language and 2) the grammatical differences between English and Thai in the process of gaining languages. Although the content of the lecture was difficult, I enjoyed it. I felt that learning linguistics is complicated and profound.

言語学って、やっぱり難しいですね。でも、それがいいなって思いました。特に、「生れながらにして、誰でも言葉でコミュニケーションが出来る」という点と、「人間は持っているけど使えないのがオキシゲンの多い空気」がある、という点に興味をもちました。人間の思考に違いがあるように、言葉もまた文化によって違うのだなと思いました。

【日本語版パンフレット裏面】

A Message from the Chair of the Department of British and American Studies



Naizan University Faculty of Foreign Studies, Department of British and American Studies aims to educate our students so that they will be able to freely use English as the now established international language and to communicate effectively in a multiback of situations. We strive to provide opportunities to deepen their understanding of different cultures from all over the world and we also provide them with skills and abilities to examine their own culture from a global point of view. We hope they will be able to use all of the knowledge and skills they have learned to contribute to both local and international society.

If it not enough to just be able to speak English, if the content of what is spoken does not have substance, then there is little point in having English speaking ability.

Being actively heard in one's own culture is not beneficial in a time when the multiback of cultures in modern global society are clashing and mixing together, creating new kinds of cultures. It is important to learn how to keep one's identity when working in modern multicultural society by learning about different cultures and becoming more internationally aware. It contrasts to the concept of Japanese traditional culture, after reserved and quiet, what is needed now is a "to it yourself", forward moving attitude, and the mental strength and perseverance to create plans and put them into practice.

Our government-funded GP program is designed for "the development of students' English communication ability to enable them to stand at the forefront of a multicultural, global society." This program will provide opportunities for intercultural interaction with universities from other countries and is doing so. It aims to maximize our students' potential. This program and its challenges could only come to fruition due to the unique international environment of Naizan University. Many of the events held by the GP project are open to the public and so you are welcome to participate along with our students to parties in the true Naizan experience. If you would like to see more of what we have been doing, please check our website: <http://eibcsp.naizan.ac.jp/>

We ask that you use for yourself the advice of our students and their ability to communicate their message to the world with the confidence and veracity of youth.

Dr. Tatsuya Suzuki

GP Student committee

Shizuko Kaio

For me, GP is a community where ideas are exchanged. For our lecture and workshops, we all work together to create events and organize them and find a great sense of accomplishment when it is done. We also get to make friends with people from other years something that is normally difficult to do. I really recommend this program to anyone who wants to have a fulfilling campus life and who wants to meet lots of different people.



Yumi Saito

The reason I joined the GP program is that I would learn a lot from people from other years and countries. I met a lot of my friends who had time with GP, meeting. As for me, I'm thinking of attending graduate school, so I'm not looking for a job. Instead, I'm trying to do something academic like reading books related to my major, American history. I want to attend special colloquia and workshops to learn while improving my ear for English. This program will be helpful. Also, I would love to use English more, and this program is a great way to do this because we use English to communicate with each other and post things on the web in English. Moreover, I don't have friends younger than my grade. I heard that a lot of members aren't two years year as me, so I want to talk with them. Also, I want to be friends with teachers too. I want to take part in studying in Hawaii if it's possible. I want to learn about racial issues there such as the civil rights movement of the native Hawaiian people.



The Ability to Reason in English

Sending out Messages in English to the World

Department of British and American Studies, Faculty of Foreign Studies

At Naizan University's Department of British and American Studies, our students do not study just the language of English, but instead learn, reason, discuss and debate "in English" a large variety of specialized fields. This more than anything creates the kind of person who not only can speak English well, but can be at the forefront of the ever expanding multicultural, global society.

What do you learn?

In order to have the ability to be at the forefront of international society, it is vital to have in addition to superior language skills, the ability to understand other cultures and have a deep rooted understanding of cultural differences. In addition to English, students learn one or two of the nine other languages, such as French, German, Spanish, Portuguese, Chinese and Korean.

How do you learn?

First and second year students study all the four skills of English (listening, speaking, reading, writing) intensively every day so that they have a firm foundation of those skills. In their third and fourth year, the students focus on their specific field of study such as linguistics, literature, foreign language education, communication, philosophy, politics, economics, international relations, history, and social studies. Students in each field focus on research and take classes in both English and Japanese to their specialty. By the end of the fourth year, students are able to debate and discuss topics related to their field in English.

The Goal of a Department of British and American Studies Student

To become one who not only speaks English, but uses English as a tool with which to study, think and debate. To become a person who has a deep understanding of other languages and cultures, through studying specialty fields such as linguistics, communication, English literature, English education and American studies. To become the type of person that has the strength and skills to be able to stand at the center of the multicultural global society.

Office of Field GP
Department of British and American Studies
Faculty of Foreign Studies
Naizan University
18 Yamamotocho, Shinagawa, Nagoya 466-8673 JAPAN
Phone: 81-52-825-2278 Fax: 81-52-825-2279
URL: <http://eibcsp.naizan.ac.jp> MAIL: info@eibcsp.naizan.ac.jp

Nanzan University Department of British and American Studies

Program for Improving University Students' Response to the Variety of Languages, Cultures, Sports, Sciences and Technology

The Development of Communication and Discussion English Skills to Be a Part of the Multicultural Global Society

Program for the improvement of multiback skills in education to enable students to participate in the modern globalized world

Greetings from the President of Nanzan University

I am extremely proud and pleased as the President of Nanzan University to have the program of the Department of British and American Studies, for the development of students' English communication ability to enable them to stand at the forefront of the multicultural global society, chosen in 2009 as a GP (Good Practice) Program by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology.

Here at the Department of British and American Studies, we strive to develop people who possess not only superior language skills, but a profound understanding of other languages and cultures.

In order to achieve this goal, this program specifically has three unique features of education:

1. Aiming beyond the basic four skills of English (reading, writing, listening, speaking), our students strive to present their ideas on specific fields of study, something that is usually done only at the graduate level of education.
2. Having a program that utilizes the modern tool, the Internet, while ensuring that the students have "real" not "virtual" experiences to deepen their true understanding of other cultures.
3. While one of the goals of the project is to improve the students' English ability, it is at the same time a project aimed at developing their planning and coordinating skills.

The students will hold international workshops with guest educators and students from overseas universities, and make presentations in joint symposiums at universities abroad, all of which will be planned and coordinated primarily by the students. Through these actual experiences, our greatest hope is that our students will develop their ability in dealing with cultural differences, learn more about other cultures, and develop their ability to put forth their message to the world through highly developed English communication skills.

As "Nanzan, the place of language", we will continue to endeavor ourselves to improve the area of language study in this region to come. However, we hope to create from a place to learn the language English to a place to learn "in English". This goal is of utmost importance to our students, but also to our faculty, researchers, and all involved in the improvement of our school.

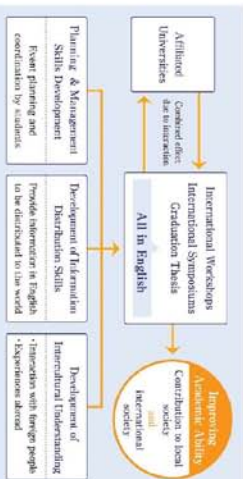
This program is a work to create opportunities for exchange between students and educators, both from within and outside the country, and further have students plan, run, and present the results of workshops and symposiums at the undergraduate level, the first step in our school's Grand Design for education.

"Only at Nanzan" could this program with its high level of student members be put into practice and it is our greatest hope that this program will maintain its potential in each of the students.

President of Nanzan University Michael Celamano



The GP Project



Our goal is to help develop Japanese people who can be at the center of global society. There are three specific goals of the program: 1) the development of planning and coordinating skills, 2) the development of communication and the ability skills, and 3) the development of the ability to understand other cultures. Through the development of these abilities, we hope to produce people who can contribute to both local and global society. This is the goal of our department's goal of developing students who have not only superior language skills, but the ability to deal with foreign cultures with great understanding so that they might stand at the forefront of the ever-developing multicultural global society.

GP Special Events

Thesis Introduction Presentation

One of the primary areas of focus for the development of communication and discussion skills is the thesis introduction presentation. Up until 2008, these presentations were held at the seminar every Saturday in 2009, the presentations were held at the department level and planned, organized, and run by the students' representatives all in English. Our goal is to continue to develop these presentations and to post the results on the web.



2009
11.4

Immigration Issues as Seen through Comparisons between Japan and America

In the current climate of increasing globalization, we see with all countries and face to face that of immigration. Three distinguished panels were invited to speak on the issues of immigration in Japan and America. Three student representative panelists from the Department of British and American Studies, Ayumi Morita, Daisuke Tanaka, and Taro Yoda, and Akiko Ohtsuka (PhD student in depth discussion after the lecture).



2009
12.20

Dr. Erin Chung, Panelist

The Nanzan University workshop was well-organized, well-attended, and lively. I found the students to be engaging and enthusiastically participated. The student representatives, in particular, made the workshop especially effective as they not only offered thoughtful commentary on each talk, but also stimulated questions and comments from the audience. Although the audience members who asked questions were articulate and well-versed, perhaps more audience members would have participated had they been encouraged to ask their questions in Japanese if necessary. Overall, I was very impressed by the organizers and students who participated in the workshop.

Ayumi Morita, Student Questioner

Before this symposium, I did not know there were people doing research on immigration-related subjects, so it was very interesting for me as an immigrant in Japan. I was happy to learn that Dr. Chung was doing some research concerning the Brazilian community in Japan. I also learned that compared to the immigration policies in Korea, Japan is behind in terms of accepting immigrants as part of the nation. I asked her what she thought about Japan making good use of the immigrants labor force when it was needed then getting rid of them now when Japan is in recession. She confirmed what I thought was the reality—human may open the doors for immigrants widely but it will take time.

Meet an American Diplomat

2009 proved to be a year of great political change in both Japan and America. The U.S. Secretary of Defense, Robert Gates, visited Nanzan University in March. The visit was a chance for the future of the United States and the future of Japan. The O&A session was led by student representatives Ayumi Morita (PhD student), Daisuke Tanaka (PhD student), and Taro Yoda (PhD student). The students had provided well in advance, making this a very fruitful workshop.



2009
12.15

Ag Murthy, GP Project Director

Mr. Sengwa's workshop was very helpful, informative, and kept the audience interested. It served as an excellent example of the use of visual aids and also showed understanding of the audience you are speaking to. As a GP workshop, I was especially excited to see our students actively asking questions that were well thought out during the O&A time. Overall, I felt it was an ideal workshop where students could interact with the speaker quite freely.

Condition B as an Epiphonemon

Following Chomsky (1980), generative grammar classifies some phrases into an amplifier, a premonition, and an epiphonemon, and tries to account for their distribution by testing Conditions A, B, and C, respectively. In this lecture Professor Tancredi, who specializes in linguistics through the perspective of generative grammar, presented his research on Condition B which has with many problems and has not been so far presented as a thinking condition.



2010
1.18

Suzuka Kato, GP Student Member

The lecture's topic was "Condition B as an Epiphonemon". It was about generative grammar. This lecture was a little difficult for me to understand. However, Professor Tancredi was smiling from beginning to end. His gentle smile made me feel relaxed.

Special Guest Lecturers from Hawaii

In our special lecture, two distinguished speakers presented the latest theories and research in first and second language acquisition and the diversity of Hawaii. Unlike previous events, a new set of the GP committee members, Hanae Miyajima, gave a short presentation introducing our department's GP program in the opening of the event.



2010
2.22

Ayuka Kojima, GP Student Member

Through the lecture of Dr. Schwartz, we learned that although people go through different processes for second language acquisition and it is a language acquisition, we achieve the same language skills in the end. Now, our GP students are studying English as a second language at Nanzan University. So from this lecture, I felt inspired to really improve my English skills in order to reach the native speakers' level.

Shiori Nagata, GP Student Member

It was my first time to take part in a lecture about linguistics. Therefore, everything was new and interesting. Especially, I was interested in two things: 1) the fact that all human beings have been blessed with the ability to use language and 2) the grammatical differences between English and Thai in the process of gaining languages. Although the content of the lecture was difficult, I enjoyed it. I felt that learning linguistics is complicated and profound.

【英語版パンフレット裏面】

多文化社会における英語による発信力育成

グローバル時代に活躍するための多面的学士力向上プログラム

本プログラムの概要

推進主体	外国語学部英米学科
目的	グローバル化する国際社会において、第一線で活躍できる人材の育成
活動内容	国際ワーキング・ショップ・シンポジウム・講演会の企画・運営を学生主体で行う 卒業論文中間発表会を英語で行い、最終的には電子ジャーナル化して世界へ発信 企画・運営を行う学生と教員が力を合わせて運営することで、学生の多面的可能性を最大限引き出す
特徴	

教育プログラム

「三つの柱」

- ① 企画・運営力の育成 (英語運用能力のさらなる向上を基礎とする)
- ② 発信発信力の育成 (英語を使用言語とする)
- ③ 異文化理解力の育成 (実体験に基づく)

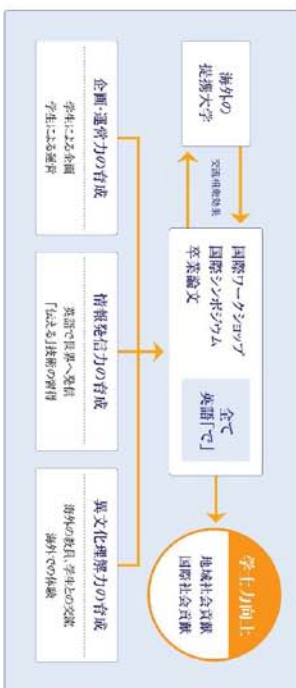
具体的活動内容

- ・卒業論文中間発表会を英語でプレゼンテーション
- ・国際ワーキング・ショップ・シンポジウム・講演会の企画・運営
- ・ハワイ大学、デューク大学との共同ワーキング・ショップ
- ・卒業論文WEB発信

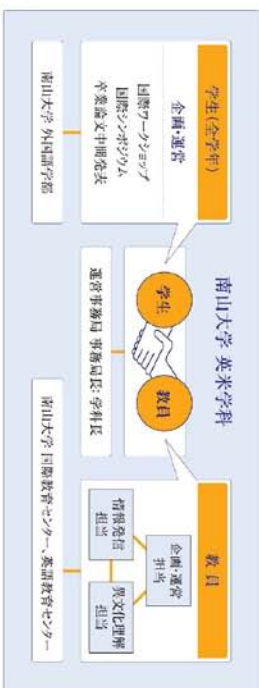
期待される成果

- ・ワーキング・ショップ・プレゼンテーションという英語のスキルのさらなる向上
- ・国際ワーキング・ショップに参加することによってコミュニケーション技術や情報発信力を向上

履修プロセスの概念図



運営体制



【本取組の概要を示すパネル】

5.4 ポスター

多文化社会
における
英米
言語
による
発信力育成

GP

Nanzan University Department of British and American Studies
平成21年度 文部科学省 大学教育推進プログラム採択

南山大学外国語学部英米学科 大学教育推進GP 事務局
〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18
Phone: 052-832-3278(直通) Fax: 052-832-3279
URL: <http://eibel-gp.nanzan-u.ac.jp> MAIL: info-eibel-gp@nanzan-u.ac.jp

【本取組で作成したポスター】

事業推進責任者

外国語学部英米学科長 鈴木 達也

英米学科 GP 事務局連絡先

Mail : eibei-gp@nanzan-u.ac.jp

ホームページ : <http://eibei-gp.nanzan-u.ac.jp>

電話 : 052-832-3278

FAX : 052-832-3279

Nanzan University

Department of British and American Studies

平成21年度 文部科学省 大学教育推進プログラム採択

多文化社会における 英語による発信力育成

グローバル時代に活躍するための多角的学術力向上プログラム

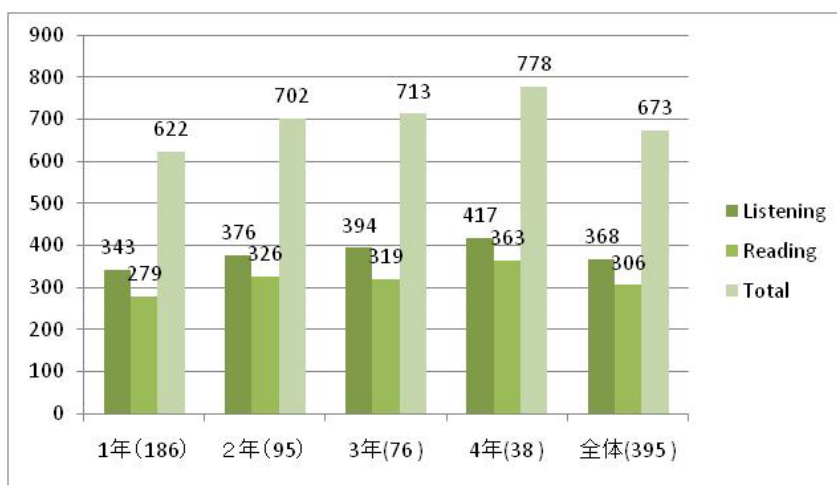
別冊



語学試験（TOEIC）結果

南山大学外国語学部英米学科の国際プロジェクト「多文化社会における英語による発信力育成—グローバル時代に活躍するための多元的学士力向上プログラム—」（平成 21 年度文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマ A】大学教育推進プログラム採択）において、客観的に学生の英語力を把握することは非常に重要です。本取組では、（財）国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会が行っている「国際コミュニケーション英語能力テスト（TOEIC）」の IP テストを利用しています。本取組は一部の優秀な学生を対象としたものではなく、本学科の全学生を対象とする取組です。2009 年 12 月に基準データを収集するために第 1 回目のテストを行いました。2010 年度、2012 年度も同時期に全学年（800 名）を対象にテストを行い、本取組によってどのようなコミュニケーション英語能力の変化があるか分析します。

1 学年別平均点

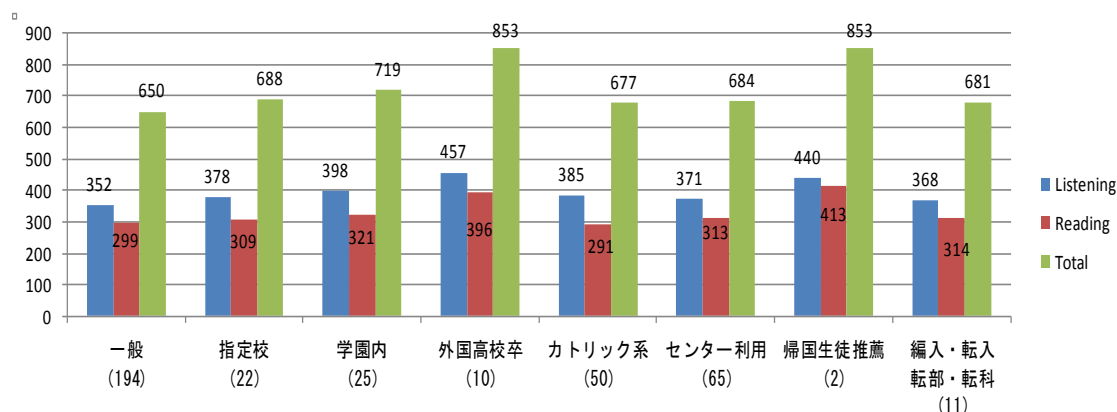


（ ）内は受験者数を示しており、グラフ上部にある数字が得点を表しています。例えば、3 年生の受験者数は 76 名で、リスニングとリーディングの得点を合わせた総合得点の平均は 713 点となっています。

今年度は語学テスト実施のアナウンスが遅かったため、高学年になるにしたがって日程の調整が難しかったのと新型インフルエンザによる影響があったことから、残念ながら 1 年生を除いて受験者数が必ずしも多いとは言えない状況になっています。

2 本校入学時の入試形態と得点の関係（回答者 379 名）

本学の入学試験・審査には一般入試の他、指定校入学審査等さまざまな形態があります。アンケートを基にそれらの形態別に結果をまとめたのが次のグラフです。



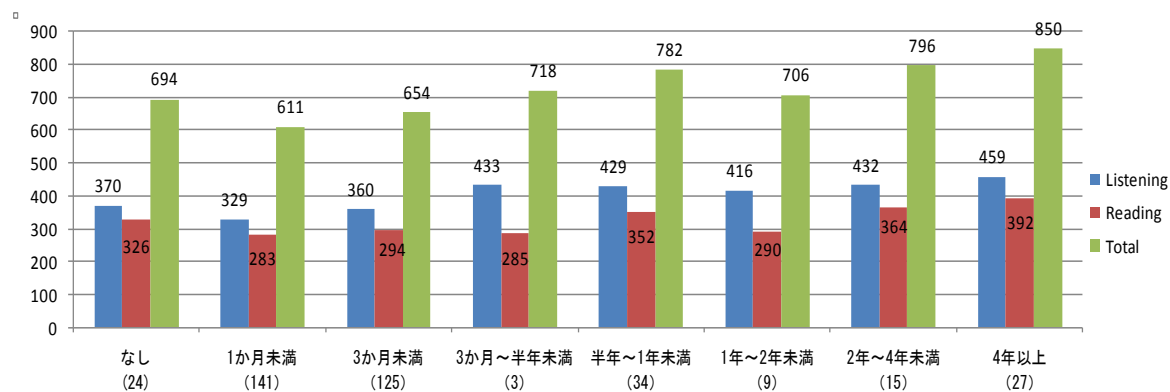
外国高等学校等卒業者と帰国生徒推薦の範疇で本学科に入った学生が他に比べてかなり高い得点を取っている事が分かります。

3 海外経験

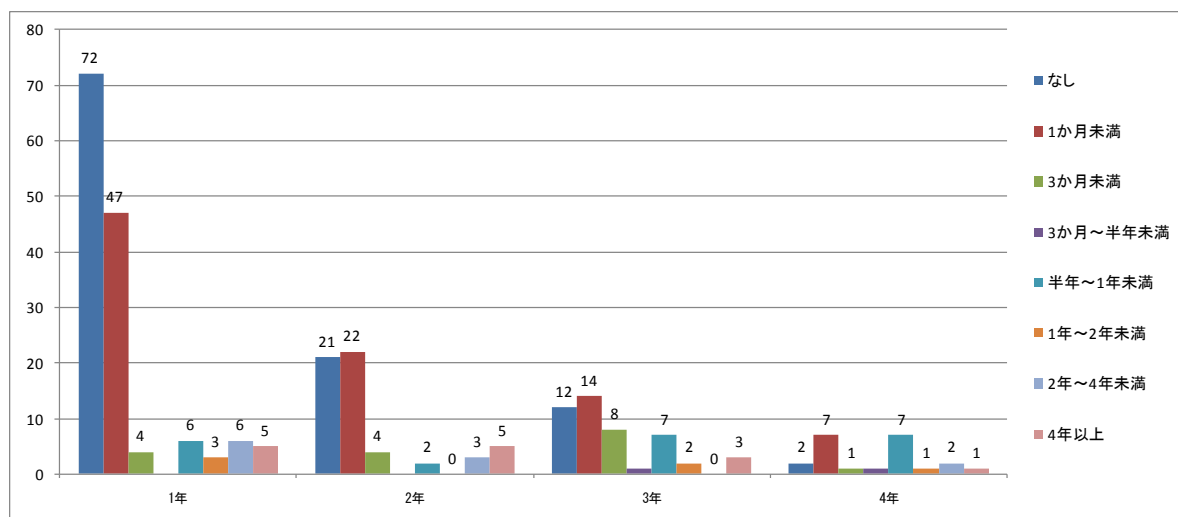
本学科には、一般に「帰国子女」と呼ばれる海外経験のある学生が多数在学しています。しかしながら、帰国子女を対象にした入学試験の受験資格は一定期間の海外滞在年数を必要としていますので、海外滞在経験がある学生がすべて帰国子女入試によって入学しているわけではありませんのでご注意ください。

3.1 これまでの海外滞在期間と得点の関係（回答者 378 名）

それぞれのグループごとの標本数にかなり大きな違いがありますので、単純に数字を比較する事はできませんが、やはり4年以上の海外滞在期間の経験を持つ学生が、他に比べてかなり高得点を取っていることが分かります。一方で、海外滞在経験のない学生でも総合で700点に迫る得点を取っている点が目を引きます。



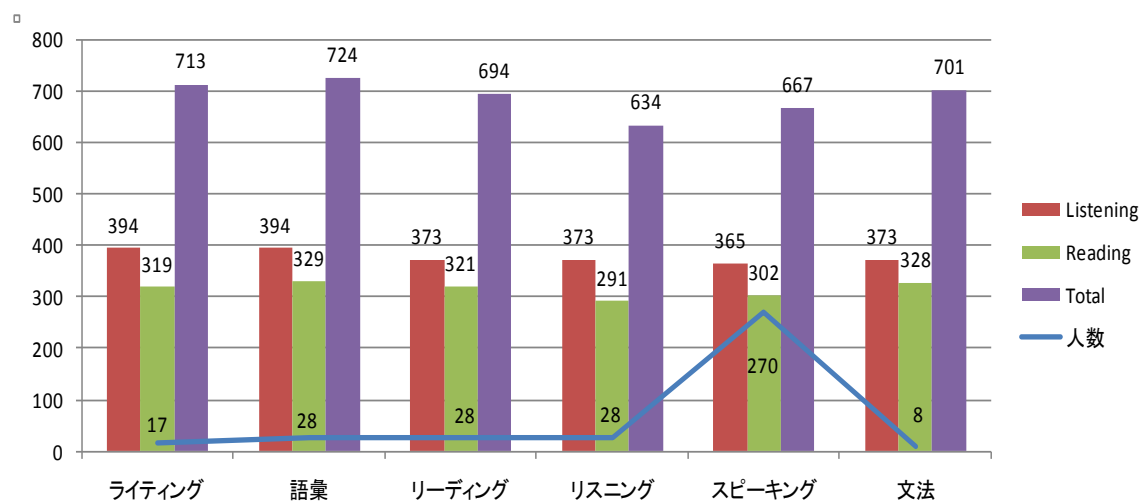
3.2 これまでの海外滞在期間(学年別)(回答者 378 名)



1年生では海外滞在経験が全くない学生が6割近くいますが、在学中に交換留学、語学留学等で海外経験をする学生が相当数あります。なお、本学科では、毎年50～60名程度の学生が交換留学制度を利用して留学しています。

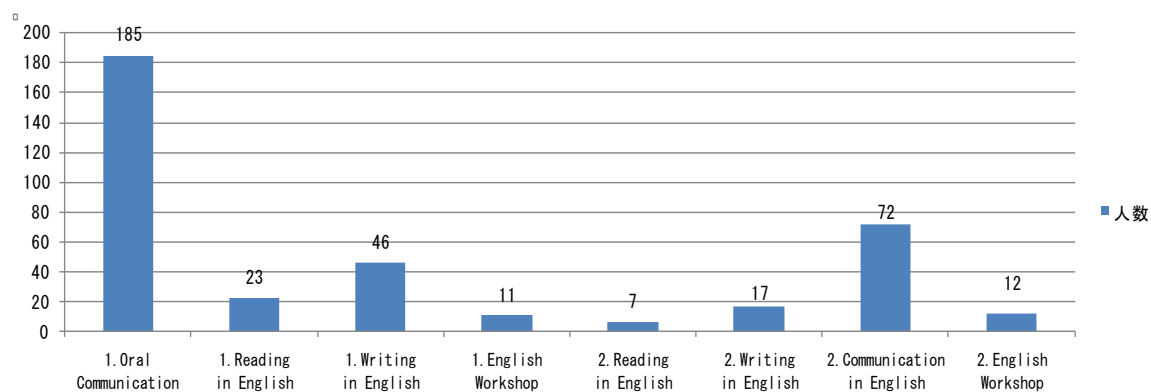
4 参考データ

学生が英語教育で特に力を入れたいと考えている分野とそれぞれの分野を選んだ学生の平均得点を整理したのが次のグラフです。ここでもスピーキングを重視する学生の数が他に比べて圧倒的に多くなっており、分析には注意が必要です。



英語教育で特に力を入れたい分野（回答者 379 名）

最後のグラフは、本学科で開講している英語スキル科目のうち学生が「最も為になる」と考えている科目を示したもので、ここでも Oral Communication を回答した学生が圧倒的に多く、スピーキングを重視する学生が非常に多いことが分かります。



英語スキル科目のうち「最も為になると思う」もの（回答者 373 名）